



people_vol.9

浅井隆
(アップリンク主宰)



社会転覆を目指す 70年代サブカルチャーDNA

故・寺山修司が主宰していた劇団天井桟敷のスタッフから、映画配給をはじめ様々なメディアにより社会を挑発するアップリンクの社長へ。浅井隆が語る、自らの半生と、これからの展望！

取材・文／森 直人
写真／中里 佳世

prologue

8月15日、暑い午後3時。

終戦記念日ということは特に気にせず、アップリンクの事務所を訪ねた僕と、カメラ担当の中里さん(元社員)の前に、どこか飄々とした調子で浅井隆さんは現われた。

随分気さくにお話いただけましたが、僕にとっての氏は、伝説の天井桟敷にいた、そして自分の学生時代に最も刺激的な文化活動を展開していた、アンダーグラウンドの偉人なのだ。



時代のエッジを担い、併走してきた浅井さんの個人史を知ること、日本のみならず世界のサブカルチャー史の、重要な一断面を知ることでもあるはず。

ご本人の口から語られた浅井隆ストーリーを、ここにまとめてみました。



[1/7] [next→](#)

[HOME](#)



people_vol.9

浅井隆 (アップリンク主宰)

社会転覆を目指す70年代サブカルチャーDNA

運動部と文芸部の大阪時代、そして天井桟敷の青春

「生まれたのは大阪なんだけど、すぐ徳島へ行っちゃって、次は滋賀県の守山市。それから小学校の高学年になって、大阪の豊中市へ引っ越してきました。南桜塚小学校、そして豊中市立第一中学校、池田高校と。

小学校の時は水泳部だったんだけど、子供ながらに、個人競技はキツイなと思ったのね(笑)。仲間との語らいもなく、ひたすら自分との闘いというのは。だから中学に入るとその反動で、とにかく一番チーム人数の多い競技をやろうと思って、15人が1チームのラグビー部に入ったんです。同時に陸上部で長距離走もやってて、当時はかなり速かったんだけど、高校の運動会で走った時に随分遅くなっていて、そこで肉体の限界を感じまして(笑)。それで高校では、ラグビー部と文芸部の両方をやるようになって(笑)。

折しも時代はウッドストックからの流れで、中津川フォーク・ジャンボリーがあったり、レッド・ツェッペリンやらディー・パープルやら、外タレのロック・ミュージシャンが来日公演を行ったり。そういう70年代初頭のサブカルチャー・ムーヴメントに、思春期がモロにブチ当たってしまった。



そんな時、大阪のサンケイホールで、天井桟敷の『邪宗門』という芝居を観たんですね。寺山修司さんの本は、『誰か故郷を想はざる』や『書を捨てよ、町へ出よう』などをすでに読んでいて、その言葉のレトリックがハマっていたんだけど、その公演でバーン！と決定的な衝撃を受けたわけです。

それから演劇に興味を持つようになって、黒テントも紅テント(状況劇場)も、大阪公演があれば必ず観に行きました。海外からロイヤル・シェイクスピア・カンパニーが来たら観に行ったし、もう熱に浮かされたように演劇を吸収してた時期だね。

でもやっぱり、天井桟敷が一番かっこよかった。海外公演やると『平凡パンチ』のグラビアを飾ったりするし、ウッドストックやツェッペリンなんかとニアコールになって、時代そのものというイメージがあった。他のアンガラ劇団は、日本の旅芝居をどこか引きずって、もっと泥臭かったんですよ。だけど天井桟敷は劇場の解体とか市街劇を謳っていて、フランスの五月革命や赤軍派などとリンクする感じがあったんですね。ブランドとしても、やってること自体も。

僕は『地下演劇』とか、天井桟敷が自画自賛している発行物を当時読みあさっていたから(笑)、そうすると寺山さんがリッキリ書いているんですよ。天井桟敷は社会転覆を目指す、と。演劇で革命をやろうとしたわけですね、簡単に言えば。演劇とかアートとかというジャンルを超えて、そういうコンセプトそのものが面白かった。それで僕は、かっこいい！ これや！と(笑)。



people_vol.9

浅井隆 (アップリンク主宰)

社会転覆を目指す70年代サブカルチャーDNA

それで、とりあえず東京に行かねばならんと思って、いくつか大学を受けたんだけど、受験勉強を一切しなかったもんだからことごとく落ちて(笑)。それでも18歳の時に上京してしまって、名目は美大を目指すということで、池袋の方にあるすいどーばた美術学院に入学しました。そこで勉強を半年くらいしてから、天井棧敷の入団試験を受けて、入ったんです。学校の後期の授業料は、生活費に当ててしまいましたね(笑)。



それが74年。しばらくして、舞台監督をやっていた先輩たちが次々辞めていったんで、舞台監督をやるようになるんだけど、まだ20歳とか21歳。他のパシリ仕事もやっていたし、短編映画を撮るとなると演出助手も俳優もやった。もう必死でしたよ。生活なんかは、劇団員全員できていけない(笑)。劇団に維持費を毎月払わなくちゃならないし、ギャラは原則ゼロ！ 僕は最後まで、交通費くらいしかもらった覚えがないよ(笑)。だから劇団員はみんなバイトしていて、男は肉体労働、女は水商売が基本。ただ役者はそれでいいんだけど、僕らスタッフは拘束時間が長いんで、もっと融通のきくビル掃除とか、最後の方はTVの大道具とか。脱落していく奴はもちろん大量にいましたよ。

天井棧敷にいた10年は、いまだに客観的に見れないんです。当時のことはいまも夢に出てくるからね(笑)。完全に青春というか、自分の20歳代と重なっているから。その10年で時代も社会も、そして寺山さんもだんだん変わっていったのは確かなんだけど、僕は若かったし、失うものも何もなかったから、83年5月に寺山さんが亡くなって天井棧敷が解散した時も、まだラジカルな気分というのは全然キープしていましたよ」



[←back](#) [3/7] [next→](#)

[HOME](#) 



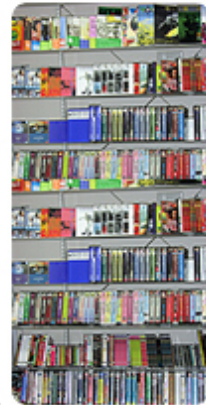
people_vol.9

浅井隆 (アップリンク主宰)

社会転覆を目指す70年代サブカルチャーDNA

天井桟敷からアップリンクへ、寺山修司からデレク・ジャーマンへ

「で、そのあとただブラブラしててもしょうがないから、明治学院大学の学生を中心にしたパフォーマンス集団を作ったんです。アップリンク・シアターという名前の。それは明学とplan Bと原美術館で3回公演をやっただけで消えたんですけど、その短い間に、世間のいろんなことに気づきましたよね。例えば、天井桟敷の浅井隆だと大手新聞も宣伝にいても一応話を聞いてくを中心にしたパフォーマンス集団を作ったんです。アップリンク・シアターという名前の。それは明学とplan Bと原美術館で3回公演をやっただけで消えたんですけど、その短い間に、世間のいろんなことに気づきましたよね。例えば、天井桟敷の浅井隆だと大手新聞も宣伝にいても一応話を聞いてくれるんですけど、アップリンク・シアターの浅井隆だと一切記事にならなかった(笑)。なるほどなあ〜と思って。天井桟敷の鎧を外した一個人の浅井隆としては、まだ何者でもないんだなって。早く気づいてよかったけどね、まだ30前だったから(笑)。



そしてそのあと、ある仕事を通して山本政志と意気投合しまして、あいつの監督した『ロビンソンの庭』に関わるんですよ。プロデューサーとして。ただ資金は彼の身内の遺産だったし(笑)、ビジネスということはまだ全く考えてなかったですね。それで山本というのわがままな人間なもので、深く関わるのはまずいなと思って(笑)。『ロビンソンの庭』の配給が終わった段階で、今度は自分が惚れ込んだデレク・ジャーマンの『エンジェリック・カンパセーション』を配給してみようかなと思ったんです。

天井桟敷には人力飛行機舎という別組織があって、映画は全部その名義だったんだけど、僕はそこでいろいろやっていたから、映画を作って、上映するという流れはわかっていた。それで人力飛行機舎の時に、ジャーマンの長編処女作『セバスチャン』の上映をしないかという話があったんですよ。結局ボシヤってしまったんだけど、そこから僕とジャーマンの関わりは始まっていたわけですね。



で、『エンジェリック・カンパセーション』を吉祥寺バウスシアターで上映することになりまして、その時にアップリンクという名前を使ったんだけど、まだ法人にはしてなかった。そのあと、ジャーマンの短編を渋谷パルコのパート3(いまのシネクイント)でやる際に、会社にしたんです。



それが87年。以降、ジャーマン作品には製作の段階から関わっていくようになるんだけど、とにかくジャーマンという人は、あまりにも強力な磁力を持っていたからね。イデオロギーとしても、社会転覆という要素が強いし。僕にとって寺山さんに代わる存在になったわけです。そういう意味では、アップリンクは天井桟敷を継承しているといえるかな。

結局、二人とも死という形でパッと終わっちゃったわけだけど、自分が一緒にやりたいと心から思えるカリスマ的才能がまた欲しい」とも、やっぱり思っていますね」

people_vol.9
浅井隆 (アップリンク主宰)
社会転覆を目指す70年代サブカルチャーDNA

自由なメディアを発想する70年代サブカルチャー世代のDNA

「94年に雑誌『餃子』を創刊するんだけど、その前に『マルコムX自伝』という本を出して、まあ一儲けしたんですよ。スパイク・リーの『マルコムX』の公開とまっぴらタイミングが合って。で、折しも『シティロード』がつぶれたんで、買取しようと思ったんだよね(笑)。というのも、『シティロード』は毎号自社広告を出していたから。



ただちょっと事情を調べた時点で買取はやめた方がいいと分かって(笑)、なら自分たちで雑誌を作ろうと。アップリンクの情報を告知する媒体がなくなったのなら、自分で作ればいいんだと。それが『餃子』の始まりです。



書籍は『餃子』の前からちよくちよく出していたんだけど、それも天井桟敷の時に学んだことが基になっていますね。劇団でパンフや雑誌を出していたし、人力飛行機舎で寺山さんの日刊ゲンダイの連載を編集したりしていたし、本を作るのは面白いなあと。高校の時は文芸部だったし(笑)。



つまり僕は、演劇オタクではなかったように、映画オタクでもないんだよね。アップリンクは映画配給会社だってイメージを持っている人も多いけれど、『餃子』を始めたら出版社だし、アップリンク・ファクトリーを始めたらイベント会社ですかって言われるし。



なぜそういうことになるのかと言えば、70年代サブカルチャーを体験した世代のDNAのせいなんですよ。あの当時は、演劇も映画もジャズもロックも文学も美術も、土俵が全く一緒だったの。サブカルチャーという大きな一つのジャンルの中で、いろんなものが交通していた。特に僕は天井桟敷という一番コアな場所で純粋培養されてしまった人間だから、DNAはものすごく濃いわけ(笑)。

どうやら僕が一貫して興味があるのは、メディアだね。天井桟敷とはメディアだったし、アップリンクもメディアだし。映画『P』や『I.K.U.』の宣伝をした時に、渋谷の街そのものに色々仕掛けを施したんですよ。それは天井桟敷の市街劇に通じる、街そのものをメディアにするという発想だったわけ。

いま『プロミス』という、パレスチナとイスラエルの子供たちをとらえたまじめな映画をやっているんだけど、自主上映をやりたいという要望がよく来るんですよ。自主上映なんていったら僕からすると超アナクロなことなんだけど(笑)、でもその際僕は、インターネットを使って会社にアクセスしてくるわけね。日本の至るところに『プロミス』がじわじわ広がっていった。それは僕の中で、渋谷の街にPのマークをゲリラ的に書きまくったことと同じような感覚があるんです。ああいう映画を自分たちで上映したいという骨のある人たちがいて、そういう草の根的な運動をインターネットがサポートして、起きた現象をマスメディアが拾い上げたりする」





people_vol.9

浅井隆 (アップリンク主宰)

社会転覆を目指す70年代サブカルチャーDNA

重要なのは“人と場所”、いま目指すのは不動産王!!



「そういうことを考えても、結局“人と場所”かなと思うんです。究極のメディアが“人と場所”。世の中を変えるという原点に戻らなくちゃいけないと思った時に、やっぱり世の中は人が変えるんだから、人に投資しないといけない。寺山さんやジャーマンのような強烈な才能を持った人、とかね。あと、場所。クラブでも映画館でもギャラリーでもカフェでも、とにかく文化を発信できる場所がないと人が集まらない。それに場所が消えることによってせっかくのムーヴメントが一気に消えちゃうのは、いままでずっと見てきたから。

だから僕が最終的に考えているのは、人に投資すること、不動産業(笑)。自分で場所を確保したいのね。マジで土地を買いたいと思ってる。賃貸じゃ自由がきかないし、いまは土地の値段が随分下がってるから(笑)。


そして、カルチャー・センター的なものを作りたい。入り口にカフェがあって、中口はブックセンターがあって、映画館があって、ギャラリーがあって、パフォーマンスのできるスペースがあって……。実はこれも、原点に戻るってことなのね。天井桟敷は、常に海外のそういう施設で公演してきたんですよ。ロンドンのリバーサイドスタジオみたいな。そういうのを東京、大阪、名古屋と、どんどん、いっぱい作る。

もちろん日本にも、行政が作った文化施設というのは多々ありますよ。ただ問題は、運営する人間にサブカルチャーのDNAがないということでしょう。ちゃんとそういうDNAを持った人間が、ソフトだけでなく、ハードの設計から関わってほしいと。



[←back](#) [6/7] [next→](#)

[HOME](#) 

people_vol.9
 **浅井隆** (アップリンク主宰)
 社会転覆を目指す70年代サブカルチャーDNA

ちなみに、いま黒沢清監督の『アカルイミライ』を準備しているんだけど、黒沢さんに、映画とは何か？って質問をぶつけたら、彼は、他人と同じ時間を共有して、映画館で映画を観ることが映画です、と答えたんです。一人でビデオを観るのは映画ではなく、社会においてどうい存在なのか確認していくことが映画だ、と。そこで彼がメディア論を語ったことに、自分と同じ70年代サブカルチャーのDNAを感じ取りましたね。同じ年なんだけど。

そう、思えば僕もいま、寺山さんが死んだ年齢(47歳)と同じ。そして天井桟敷は10年いたけど、アップリンクはもう15年やっている。ここで初心に戻って、面白い文化を発信する新しい場所を本当に作りたいんですよ。一つじゃなく、いっぱいね。不景気のいまだからこそ、不動産王になって(笑)。渋谷でアップリンク・ファクトリーを7年くらいやっているけど、あそこは、ある時は映画館、ある時はギャラリーというように、一つのスペースで用途を変えているから、運営が厳しいんです。やっぱり総合スペースでない。それには広い土地が必要なんだけど、物価の安さも含めて、大阪には、いま東京より可能性を感じるんですよね！



profile



浅井 隆(あさい たかし)

アップリンク主宰。プロデューサー
 演劇実験室「天井桟敷」にて舞台監督を務めた後、アップリンクを設立。
 デレク・ジャーマン監督作品の『BLUE』『ザ・ガーデン』『エドワード』『ワイトゲンシュタイン』などを共同プロデュース。
 ジョン・メイブリー監督『愛の悪魔』、ロウ・イエ監督『ふたりの人魚』などの海外の監督作品を共同プロデュース。
 オールロンドンロケのフジテレビの連続深夜テレビドラマ『90日間テナム・パパ』では演出も担当。
 最近のプロデュース作は3組の若手映像作家の作品を集めたDVD『イメージ・ガーデン』と2003年公開予定の黒沢清監督『アカルイミライ』
 アップリンクHP <http://www.uplink.co.jp/>



森 直人(もり なおと)

映画批評&雑文業。1971年、和歌山市生まれ。
 近畿大学文芸学部卒業。97年よりライター業開始。
 編著に『日本製映画の読み方』『21世紀/シネマX』(フィルムアート社)。
 共同HP <http://www3.ocn.ne.jp/~missitsu/>